

OSCE で模擬患者 (SP) を体験した学生のフィードバックの視点

○佐伯良子、室田昌子、高尾憲司、村上佳栄子、笹川寿美、滝下幸栄、三橋美和、眞鍋えみ子(京都府立医科大学医学部看護学科)

**【目的】**

A 大学看護学科では、3 年生の領域別実習前 OSCE において 20 単位の領域別臨地実習を終了した 4 年生が模擬患者(以下 SP)の役割を担っている。そこで 4 年生が 3 年生の受験者にフィードバックした内容を分析し SP としての学びや上級生が SP を体験することの意義について検討する。

**【方法】**

対象者は、A 大学看護学科学士課程 3 年生の OSCE においてボランティアで SP を担当した 4 年生 15 名である。SP の募集は「看護の実践と統合 1」(1 単位 30 時間)の授業を受講している 4 年生を対象に自主的参加 SP を依頼した。SP は OSCE 実施前に模擬患者説明会に参加し、課題、模擬患者としての役割、模擬患者として大切なこと、フィードバックの方法などの説明を受け、事前に教員が作成した課題場面のシミュレーションビデオを視聴した。資料として患者設定、場面等必須事項を記載したものを配布した。OSCE 実施時に SP は受験者による課題遂行が終了すると受験者に対して口頭でフィードバックを行い、その内容を記述した。SP によって記述されたフィードバック内容をデータとして分析した。まず、記述を細分化し類似性に従いカテゴリー化した。2 名の研究者で討議し行った。倫理的配慮として学生に研究の概要及び参加の自由、不参加の場合でも不利益が生じないこと、成績には関係しないことを書面と口頭で説明し、同意を得た。

**【結果】**

15 名の記述の総数は 69 であった。カテゴリー化の作業により【患者の心を動かす行為】【学習経験者としての良かった点の指摘】【学習経験者としての改善点の指摘】【受験者の印象】【受験者への期待】の 5 つのカテゴリーが抽出された。【患者の心を動かす行為】では、「丁寧・スムーズな対応」「親しみやすい表情・姿勢」「目を合わせたコミュニケーション」「状況や思いを伝えられる」「理解・安心できる関わり」等のサブカテゴリーが抽出された。【学習経験者としての良かった点の指摘】【学習経験者としての改善点の指摘】の共通のサブカテゴリーとして「説明の仕方」「コミュニケーションの内容・方法」「援助時の患者への気づかい」「プライバシーへの配慮」「状況判断の視点」「看護技術の方法」が抽出され【学習経験者としての改善点の指摘】では「患者への負担」「状況把握とその判断の重要性」が加えて抽出された。【受験者から受けた印象】では、「緊張感が伝わる」が加わり【受験者への期待】として「激励」「ねぎらい」等が抽出された。

**【考察】**

対象者は受験者の緊張を感じながらも患者の心身の状態に寄り添った安全、安心、安楽なケアの提供が求められていることをフィードバックし、その役割を果たしていた。さらに看護師及び学習経験者としてアセスメントや技術面、看護師としての基本的姿勢についての気づきをフィードバックしていることが示された。以上より臨地実習を終了した学生が SP の役割を担うことによって自己の客観性を高める学習になり得ることが示唆された。